

•••••

アナン「これはまだ24世紀でも明らかにされてなく、一部の変わった研究者の学術的な見解なので、参考になるかさえ、わからないのですが……」

奏太「それって、どういうことだ？」

アナン「つまりパラレルワールドでもなく、どの歴史ともつながりのない、まったく新しい世界が突然できてしまう事例もあるという学説です。今の奏太さんがいるこの世界は、過去の歴史の延長上にあります。実はあおいさんがこの時代にやってきた時点から、二つの歴史に分かれたんです。

一つは奏太さんが3年後に亡くなる本来の歴史の世界。そしてもう一つは、あおいさんが未来からやってきてあの魔法陣から奏太さんを救った、新しい歴史が現れたんです。つまり奏太さんが今、生きているこの世界は、あおいさんの本来いる世界から見れば、パラレルワールドになるんです。どちらも実在する世界なのです」

奏太「なるほど、パラレルワールドの意味が少しわかった気がする。つまり俺が未来で亡くなる歴史と、あおいちゃんがやってきて俺が助かる歴史の二つがあるってことだな」

アナン「そのとおりです。その二つの歴史は、同じ歴史の延長上から二つに分かれたものなのです。しかし、どこの歴史ともまったくつながりのない世界が突如、現れる例外もあるという学説です。これは極めて異例の学術論文なので、研究者たちの間からも異端とされてはいるのですが……」

奏太は、わかったような、わからないような様子だった。

奏太「ふっ、記憶にだけとどめておくよ。24世紀の科学力はタイムマシンを開発するくらいだからな。俺にはもうわからない世界だ」

アナン「タイムマシンは、過去や未来に移動した人が、他の誰かにタイムマシンを奪われないようにするため、運転手によるパスワード設定が義務化されています。メンテや修理のために一時的にパスワードを解除することだけは我々でもできますが、運転のためのパスワードは、私たちでも確認は不可能です。」

それは過去や未来に行った運転手を守るためのものです。あおいさんの設定したパスワードがわからなければ、タイムマシンはもう二度と動かすことはできません」

奏太「あおいちゃんは……もう二度と助からないのか……」

アナン「この時代にはもう一人の……3歳年下のあおいさんが生きています。未来のあおいさんのことはとても残念ですが、あなたはこの時代で幸福をつかむことを、亡くなったあおいさんも願われているでしょう。地下室のタイムマシンは明日、タイムポリスが永久ロックをかけます。これで私たちのすべての任務は完了です」

奏太「ああ、本当にいろいろすまなかった。ありがとう」

アナン「それでは奏太さん、気を落とさずに。この時代で生きているあおいさんを大切にして、生きてください」

（途中省略）

——その日の帰り道、奏太は研究所の前を通りかかると、ある人物と出会った。それはアナンだった。

「やあ、この世界には、もう慣れましたか？」

アナンと最後に会ったのは3年半前だった。

「お久しぶりです。奏太さん」

「アナンか」

——奏太は、タイムマシンで3年後の未来にタイムワープしてから、この世界にやってきた経緯と、この世界で起きていることを、アナンに話した。

あおいが栄一の妹として生まれていない世界。学校名が微妙に異なるが、それ以外は以前の世界と変わらぬ世界。そして記憶喪失のあおいがこの世界に投げ出されていたことを……。

アナン「そうだったんですか。奏太さんが今いる世界は、やはりパラレルワールドとも異なるようです。まったく新しい世界が突如、生まれたと言うのかな。奏太さんが体験した話を聞く限り、まるで宇宙の歴史が一巡した世界にやってきたとしか思えないです」

奏太「……となると、あれか。怪しい学術論文にしか存在しない、異端の学者さんが唱

えていた世界に、俺はいるということか」

奏太は笑いながら語りかけた。

アナン「まあ、そういうことになりませうかね。まったく別の新しい世界が誕生すると唱えたあの学者の説も、これでただの妄想ではなかつたと言えますかね」

奏太「そりゃ、そうだろう。今、この世界に俺が住んでいるんだから。妄想ではすまされないだろうな」

アナン「前にも言いましたが、24世紀においても、歴史を変えたらどうなるか、まだまだ謎が多いんです。私も新型タイムマシンの試運転中に、この世界の座標を偶然発見し、その座標に向かったところ、ここにたどり着いたわけですから」

奏太「すると……この世界を発見するまで、3年半かかつたと言うのか」

アナン「3年半という表現が正しいかは微妙ですが、発見に時間がかかったのは事実ですよ。なにせあおいさんがタイムワープしてやってきた世界、つまりあなたが元いた世界の座標が突如、消えてしまつたんですから」

奏太「消えてしまつた？ 俺が高校時代にあおいちゃんと会っていた、あの世界のことか？」

アナン「そうです。あおいさんがタイムワープした時点からパラレルワールドができてしまったんですが、その世界がなくなっていたんです。おそらく、あおいさんが滞在した期間がわずか数日で、あなた以外の人と接触していませんでしたから。

そのため、歴史に影響を与えることはなく、歴史の軸は元とおりの一本となり、パラレルワールドはなくなったのではないかと24世紀の学者さんは説明していましたよ」

奏太「そのあたりは、俺にも理解が難しいな」

奏太は少し苦笑いをした。

アナン「しかしあなたが言うそのあおいさん。本当に消えてしまったあおいさんで間違いないんですか？」

奏太「ん、どうしてだ？」

アナン「一度肉体を失った人間が、他の世界とはいえ、再び肉体を取り戻して現れるなんて、24世紀の科学でも、とても考えられないことなんです……」

奏太「ああ、間違いなくあおいちゃんだ。俺が言うんだから間違いはない。ただひよつとしたら……あのネットクレスの宝石のおかげとも思ってたな」

アナン「あのベガ光石ですか。私が最後に見たときは、最後の灯ともしびの光のようになっていて、光エネルギーがもう残っていないと思っただんですが」

奏太「俺がこの世界にやってきたとき、ポケットの中であの宝石が粉々に砕けていてね。きつと宝石が俺の最後の願いを叶かなえてくれたのかなって思ってるよ」

アナン「そういえば、以前、会長から聞いたことを一つ思い出しましたよ。ベガ本星は人だけでなく星もまた、霊体おぼになったり、物体として現れたり、自由自在に変化できるということだね。だからベガの神秘の魔法なら肉体を復活させることくらい、たやすいのかもしれないですね」

奏太「それに俺だって、自分自身と出会って肉体が消えてしまったようだし。宇宙の歴史が一巡した感覚も憶おぼえているよ。これっておじいちゃんが言われるとおり、宇宙を崩壊させたってことになるのかな。でも世界はけっして崩壊していないし、別世界だが、俺もこうして生きている」

アナン「まったく、あなたたちは……。24世紀の私でさえ、まったく予測不可能なことを起こしてくれますね」

奏太「もう俺にも、わからないことだらけだよ」

アナン「それは、私たち24世紀の人類にとっても同じです。ひよっとしたらベガ本星の人たちから見たら、21世紀も24世紀も、地球の科学文明なんて、どちらも原始人レベルにしか見えていないかもしれないですね」

奏太「そりゃ、ちがいないな」

奏太は笑って答えた。

アナン「それにしても、あおいさんの記憶が戻らないのは残念ですね。それとも……もう一度タイムワープして、中学2年のあおいさんが存在している元の世界に戻ることも可能ですが……試してみますか。」

24世紀において、消えてしまったあの世界に干渉できるのは、もはやあなただけです。そこはあなたが作り出した世界なので、あなたにしか干渉できません。ひよっとしたら、消えてしまったパラレルワールドが再び復活するかもしれませんが……」

奏太「おいおい、タイムマシンの乱用は極刑だろ。タイムポリスのあんたがそれを言っ

ていいのかい。それにずいぶん時が経過して、燃料が足りるかどうかも危ういよ」

アナン「実はこつそり予備燃料を地下室のタイムマシンに入れておきましたよ。往復で10年分の燃料はありますよ。私がこの世界にやって来たということは、もう一度、あなたがいた元の世界に戻る機会が与えられたということです。これはタイムポリスの総監から特別許可が下りたことでもあり、タイムポリスからあなたへのお詫びでもあります。元の世界に戻るように座標もセットしておきました」

奏太「そうか、総監の心遣いはとても嬉しいな」

アナン「ただし、タイムポリスからのおせっかいは、これが本当に最後になります。もう二度と私も、あなたと会うことはないでしょう。しかしあなたならタイムマシンの操作は、私たちがいなくても大丈夫と思います。タイムマシンを使うかどうかは、あとはあなたのご判断次第です」

奏太「ああ、あとでゆっくり考えておくれよ」

アナン「私たちは、あなたなら間違った使い方はしないとと思っています。だからあのタイムマシンを使うかどうかは、あなたに完全に委ねます」

奏太「いろいろ世話になったな……あ！　あと、そうだ！」

奏太はここでふっと思ったことがあった。

奏太「ところでアナン。あおいが元からいた世界はどうなったんだ。あおいがもともといた世界では、あおいがいなくなつて、栄一や両親も心配しているのではないか」

アナン「あ、そうそう。大切なことを言い忘れていましたね。あおいさんがもともといた世界では、もちろん、あなたは亡くなつたままです。ただしあおいさんは生きてあの時代を生きています」

奏太「ええ！！　あおいちゃんがもとの世界にも存在しているって！」

あおいがもともといた世界でも、あおいが存在していることに奏太は驚いた。

アナン「はい、実はそうなんです。これには私たちも驚いているのですが……」

奏太「じゃあ、タイムワープして俺を助けにいったことも憶えているのか！」

アナン「いえ、その記憶はまったく憶えていません。私はこっそりあおいさんを調べたのですが、あおいさんはもちろん、タイムワープした世界で消滅してしまい、元の世

界には戻りませんでした。当然、元の世界では、あおいさんの家族は捜索願いを警察に出しました。しかし、捜索願いが出てまもなく、南井町の旅館近くの海岸で、偶然、あおいさんが倒れているのが発見されたんです」

奏太「この新たな世界で、あおいちゃんが発見された場所と同じだ……。それでもこの世界のあおいちゃんは無事だったのか！」

アナン「あおいさんが発見されたときはどこも怪我はなく、健康状態も正常でした。ただし、『なぜ、この海岸で倒れていたのか』『行方不明だった数日間、何をしていたのか』『どこに出かけていたのか』などの記憶がまるでなかったのです。それと……。もう一つ、大きな記憶障害が起きていました……」

アナンはふうつとため息をして、ここで間を置いた。

奏太「……アナン、その記憶障害とは……」

アナン「元の世界のあおいさんが失った記憶とは、あなたの記憶です。つまり奏太さんと中学2年の時にはじめて出会い、恋をし、大学まで弁当を運んだこと。奏太さんが事故で亡くなり、悲しんだ記憶。タイムマシンで奏太さんを助けに行った記憶など……奏

太さんに関する記憶のすべてがなくなってしまったのです」

奏太「そんなことが……」

アナン「でも、栄一さんやご家族は、それでよかったと言っていました。奏太さんを失って誰よりも悲しんでいたのはあおいさんでした。むしろ、奏太さんの記憶を完全に失ってからは、普通に学校に通って元気にしている様子です。栄一さんは、奏太の記憶があつたままだと、一生引きずっていた。奏太の記憶を失って、元気でいられるならそれでいいと思っっているようでした」

奏太「そうか……それで他に障害は起きていないのか。例えば学力が下がったとか……」
アナン「調査結果ではそのようなことはありませんが……。他はいたって、今までと変わりありません。まるであおいさんの魂が二つに分離して、奏太さんの記憶を宿していた魂の一部が、あなたがいるこの世界に投げ出され……そして残りの魂は元の世界にそのまま戻り、肉体がそれぞれの世界で復活したような感じですよ」
奏太「そんな摩訶不思議なことが……」

アナン「ベガはもともと、霊界と地上世界を自由に行き来できるだけでなく、別次元、つまりパラレルワールドにも干渉できると言われています。もちろん肉体を蘇生するこ

とも再生することも、ベガの人たちなら可能でしょう。なにせ、24世紀の地球の科学力ですら、解明できないことは、この宇宙にはたくさんありますから」

奏太「これは……やはりベガ光石が、最後の力を振り絞って起こした奇跡としか説明できないな」

アナン「そうですね」

奏太「それでは……元の世界のあおいは、元気で過ごしていると考えてよいのだな」

アナン「はい、元の世界のあおいさんはずっと元気です。『今』と言うとおかしな表現ですが、元の世界のあおいさんはすでに大学2年になっています。奏太さんの記憶は相変わらず何も思い出せないままですが、元気な大学生活を送っていますよ」

奏太「そうか……。元の時代のあおいちゃんにとっては、俺の記憶など忘れていたほうが幸せに生きられるからな」

このことについては、さすがの奏太も驚いた。奏太は不思議な体験を積み重ね、大抵のことにはもう驚かなくなったが、あおいがいた元の世界でも存在していることには、さすがに驚きを隠せなかった。

まだまだ俺の知らないことはたくさん、この宇宙には存在するんだということを改めて、奏太は知ることになった。

奏太「いろいろ世話になったな、アナン」

——アナンと最後の別れを告げてから、奏太は家に戻り、おじいちゃんが生きていたときに使っていた部屋に入った。そして、カギのかかった金庫の引き出しを開け、小さな箱を取り出し、中身を取り出した。

箱の中にはおじいちゃんの形見が入っていた。それはまさしくベガ光石だった。あおいが、別の世界から持ってきたネックレスの宝石は、粉々になってしまった。しかしこの新しい世界の宝石は、おじいちゃんの部屋の金庫にそのまま残っていた。

ただアナンの話によれば、ベガ光石の不思議な力は、もうないらしい。奏太は、アナンの帰り間際に聞いたことを思い返している。

アナン「ベガ光石に宿した神官の魔法は、別次元の世界とも共有していると聞きます。おそらく、この世界には壊れていないベガ光石も存在しているでしょう。しかしあの黒

魔法使いを封じ込めたエネルギーはもう宿していません。

ベガの魔法は時空間を超えて共有する、地球ではいまだ解明できない不思議なものなのです」

ただ奏太は、宝石に魔法が宿してあるかどうかなんて、気にしていなかった。あおいと再会でき、再びこの宝石をプレゼントできることが一番嬉しかったのだ。